



現地参加できなかった第117回日本精神神経学会学術総会のオンデマンド配信初日、真っ先に視聴したのは上野千鶴子先生の特別講演「女が増えると精神神経医学は変わるか？」である。司会の加茂登志子先生がおっしゃったように、本学会の代議員選挙で50人の女性枠ができ、女性の代議員、理事が増えた変化の年にこの講演が企画されたのは実にタイムリーで、プログラムをみたときから大変楽しみにしていた。そして期待どおり、とても刺激的な講演だった。

著者のなかでずっともやもやしていた考えをはっきりした形にするために大きなヒントになったことが2つある。1つは上野先生が「強制力のあるクォータ制抜きで男女平等が達成された社会はほとんどない」と断言されたことである。たしかに、人口の半分を占めているにもかかわらず意思決定の場では常に少数派で、差別的な待遇を受けても状況を変えられずにいる女性にとって、この underrepresentation の是正をめざすことは喫緊の課題だ。上野先生は、数が増えることの意義について「202030（2020年までに全分野で指導的地位の女性の割合を少なくとも30%にするという、未達に終わったスローガン）」に言及し、「最初何で202050やないねん？と思ったが、少数者の割合が30%を超えると少数者でなくなり、その組織の文化が変わる分岐点なので、30という数字にはそれなりに意味がある」と説明された。また日本学術会議の例を出され、かつては推薦制で大学学長などでなければ会員になれず、そうした要職にある女性が少ない以上いつまでたっても女性が増えないため、2005年に選考方式を変えたところ、女性会員の比率が6%から33%まで増えたと話された。これまで著者は「差別も嫌だけれど特別扱いも嫌だ」と考え、クォータ制の必要性を理解しつつも、実力以外の要素、しかも性別という何の努力もせず得ている属性で選ばれることを潔しとしない複雑な思いがあった。しかし、女性枠ができて初めて多くの女性会員が立候補した今回の代議員選、理事選を通して、日本学術会議と同様に本学会でも実

態としては自然に女性が増えるしくみになっていなかったことを痛感したばかりだったため、「男女平等の実現には強制力のあるクォータ制が必要だ」という上野先生の言葉がすっと胸に落ちたのだった。

2つ目は「女を増やしてどうしたいのか？」という、より本質的な問いである。単に男性と同じように働き、同じように処遇され、同じように権力を行使できるようになることが目的なら、指導的地位に就く女性が増えることにさほど大きな意義はない。男女共同参画の実現によってわれわれ女性は何をしたいのか？ これまでの男性とは違うやり方で、何をどのように変えていきたいのか？ 数を増やして満足するのではなく、この問いの答えを出すことが何よりも重要だと思う。著者は、差別されることの痛みを忘れずにその体験を生かすこと、つまり声を上げて聞き届けられず、差別や抑圧に苦しむ人たち—精神科医にとってはまず目の前の多くの患者さんたちであろう—の側に身を置き続け、決して抑圧する側にはならないよう自身を戒めながら働くことによって、まず身近なところから変えていければ、と漠然と考えていた。上野先生はフェミニズムについて、「女が男のようにになりたい、男と対等になりたいという要求ではなく、弱者が弱者のまま尊重される社会を求める思想」であり、「権力を行使する立場になっても、非暴力、すなわち相手を自分の思いどおりにしようとしないうことを学ぶ生き方である」と述べ、ご自身のめざすものを明確に示された。この言葉に深い感銘を覚え、これが真のフェミニズムであるなら著者も誇りをもってフェミニストでありたいと思った。

「女が増えて精神医学、精神医療はどう変わったのか？」5年先、10年先にこう問われたときどんな答えが出せるか、それはわれわれ女性精神科医のこれからの行動次第でもあるということを肝に銘じつつ、日々の業務や学会での活動に微力を尽くしたいと考えている。

山口寿子